



DE
KI
IMO!
妹
お兄ちゃんに
デキちゃう?

実妹し
義妹し
お兄ちゃんに
デキちゃう!

立ち読み版

小説 089タロー

挿絵 ここあ

序章	実の妹と新しい妹	006
一章	ブラコンが二倍！	027
二章	妹たちのブラコンバトル！	054
三章	ブラコン義妹の突撃子作り！	084
四章	実妹だってお兄ちゃん大好き！	117
五章	実妹だつて子作りしちゃうからっ！	151
六章	エッチな妹の子作り合戦！	185
七章	妹たちとの子作り祭！	214
終章	エッチな妹たちとデキちゃった生活	249

登場人物紹介

Characters

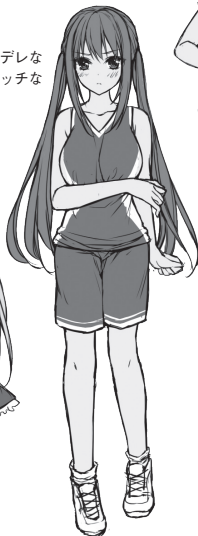
こぐら まな 子蔵真奈

学園では凛として生真面目な美少女で、兄と二人ぎりになるとベッタリと甘えてくる隠れブラコン。



こぐら しずく 子蔵雫

真奈の妹で衛に対してはツンデレなボーイッシュ美少女。実はエッチなことに興味津々。



こぐら みつき 子蔵美月

少々夢見がちなところがあり、衛を運命の相手と公言する。普段はクールな美少女だが行動は結構大胆。



こぐら さつき 子蔵皐月

美月の妹で好奇心旺盛、天真爛漫な元気系美少女。無邪気ながらも小悪魔的なところがある。

こぐら まもる 子蔵衛

温厚な性格で妹たちに甘い少年。無官の白丁として実家の神社を手伝っている。

序章 実の妹と新しい妹

そこは、とある小さな街の隅にある古びた神社だった。

すぐ隣にある宮司宅から、学生服を着た一人の少年が飛び出して来る。

「ああまずい、遅刻しそう。今日は全校朝礼の日だった」

まるで昔のラブコメみたいにパンを啜くわえて通りに入る。幸か不幸か美少女とぶつかるなんてことは起こらない。

「おう衛まもる、今からか？」

自転車通学の学友が通りかかり並走しながら話しかけてくる。

「うん、遅れちゃってさ。朝の奉仕してたら、つい」

「また掃除か？ 毎朝早起きして大変だな神社の息子ってのも」

寝坊の末の遅れでないことを学友は知っている。

そして、この神社のことを知らない人は、この街には一人もいなかった。

「もうすぐ祭だもんな。へへ、何組の夫婦がアンアン言うかな？」

「おいこら。子宝の神様に失礼だぞ。みんな真剣に励んでるんだし」

「いいじゃねえか、オレも励みてー。ま、仕込み作業を、だけどな」

ニヒヒと笑うと、学友は自転車の荷台をあごで指す。

「乗ってけよ。早いぜ」

「そうしたいけど遠慮するよ。二人乗りすると真奈に怒られるから」

「はは、妹の顔色を窺うつても兄貴としちゃ泣けるもんだな」

「じゃっ、と手をあげると、学友は自転車飛ばしていった。

それを追うように、彼、子蔵衛は全力でまた駆け出した。

「——以上が注意事項となります。このお祭りには多くの方々がみえるでしょうから、礼を欠く言動は慎むようお願いします」

毎月一度の朝の全校集会。講堂の壇上にて、一人の少女が全校生徒に向けて話していた。

「やっぱ綺麗だよな真奈ちゃん。マジでカノジョにしてえ」

「スタイルもたまんねえよな。胸とかサイズいくつだよあれ」

居並ぶ男子らの噂話を耳にしながら、衛もまた密かに見惚れていた。

(…：やっぱ綺麗だなあ真奈は。副会長もサマになってる)

話し終えて降りていく少女を自然と目で追っていた。

長い黒髪をサイドポニーにした、大変美しい女の子だった。

形のよいつぶらな瞳に可愛らしい小振りな唇。それらがバランスよく並ぶ顔は男なら思わず目で追うレベルで、しっかりと前を向く表情には利発さと生真面目さが表れていた。

それでいて身体は発育がよく、白い夏用セーラー服の胸と腰部分が膨らんでいる。特に

胸は圧倒的で、青の襟元が今にもはち切れそうだった。かといって太った印象はなく、細いくびれやスラリとした手足が実に女性的だった。

(兄として鼻が高いよ。それに……魅力的すぎる)

見慣れたはずなのに衛はそう思わずにはいられなかった。

彼女の名は子蔵真奈。生徒会副会長を務める才女であり、衛の自慢の妹でもある。

一年先輩の彼の耳にも、真奈の人氣は絶えず聞こえていた。成績は常にトップクラスで生活態度も品行方正、おまけに人望も厚いという隙のない優等生っぷりなのだ。

「真奈さん、この資料ですけど、会長のチェックが遅れちゃって……」

「こっちのパンフも今日中に仕上げろって先生が……」

「大丈夫よ、慌てないで。わたしがチェックして報告します。あなたは集計結果をまとめておいて。パンフも平気、わたしが人手を集めておくから」

集会が終わりぞろぞろと生徒らが出ていく出入り口で、真奈は女子生徒と話している。柔らかに微笑む表情には、余裕と共にある種のカリスマ性すら感じられた。

「真奈ー早く行こうよ。まだ生徒会？」

「ごめんさい。もう少しかかりそうなの。すぐ戻るから、また後でね」

「真面目ねー。あ、後で宿題写させてー」

「こーら、自分でやらないと意味ないわよ」

友人たちにも好かれているらしく明るい笑声が聞こえてくる。近くを通りかかった衛は

思わず笑みをこぼしていた。

と、真奈の視線がこちらを捉えて止まる。

「……兄さん。今日は遅刻寸前だったそうですね」

唐突に真面目な表情で言われて、衛はつい口籠もった。

「あ、うん、ごめん。掃除してたらつい、ね」

「気をつけてください。お勤めも大事ですが学生の本分を忘れないようお願いします」

そっけなく言うのと、真奈はどこか澄ました顔でスタスタと歩み寄り手を伸ばしてくる。

「それとネクタイが曲がってます。くれぐれもだらしのない態度は慎んでくださいね」

「はは、ごめん。気をつけるよ」

「では、もう行きますから。あと、今日は帰りが遅れるので夕食は自分でお願いします」

「うん、分かった」

他人行儀な妹の態度に、けれど衛は明るい笑顔で応えていた。

そんな兄を少しだけ見つけた美少女妹は、すっと目を閉じ、踵かかとを返して立ち去っていく。

「あちゃー。お兄ちゃんには手厳しいな真奈ちゃんは」

隣をいく学友が肩を叩いて同情してくる。

「はは、まあ、ね」

複雑な気分で衛は苦笑いを返していた。

その日の放課後。衛は数名の学友と共に、体育館の二階のギャラリからバスケット部の活動を眺めていた。

「いやー躍動的な女の子って絵になるなー」

「いつもそんなこと言ってるなお前」

ニヤけた学友を見て衛は苦笑する。

「お前こそなんでここにいるんだよ。バスケット部の女子見にきたんじゃないのか？」

「雫しずくに会いにきただけだってば」

スケベ根性で来たわけではないと暗に主張する。

眼下に見下ろすコート内では、女子バスケット部員たちが練習試合で汗を流していた。

その中の一人が、パスを受けて軽快に駆け抜ける。

「お、噂をすればなんとやらだ」

学友が指差すその少女は、部員の中でも一際輝いて見えていた。

快活で意志の強そうな眼差し。すつと通った鼻梁。汗の浮いた煌めく白肌に、光沢を放

つ茶色の長いツインテール。

エネルギーに動く彼女は、まるで若い牝鹿のように美しくてしなやかだった。それ

でいて身体は起伏に富み、赤のランニングウェアと短パンの胸腰をぐつと持ち上げていた。

（真奈も美人だけど雫もまったく負けてないな。ほんとに綺麗で……よく育ったなあ）

みんなが思わず見惚れる間にも、少女はドリブルでディフェンスをかくぐり、ついに

はリングへと向けてダンッ、と高く飛翔する。

「おおっ、抜いたぞ！」

「飛んだ、すげえ！」

ブロックを避けて腕を伸ばすと、丸々と実った豊満な乳房がぶるんつ、と大きく跳ね上がった。腰の振れがウエアを搾り、くびれの細さも鮮明になる。

そしてボールがリングを抜けると、少女は鮮やかに着地して、長い髪を軽く揺すった。透明な汗がぱらつと散って陽光を浴びて小さく光る。

「キヤーかっこいいー！」

途端に一階から女子の黄色い歓声が飛ぶ。

「さすが雫、バスケ部期待の星！」

「もー女子とは思えないくらいステキっ！ 男子とか目じゃない！」

「ちよつとやめてよ、アタシそつち系じゃないんだから」

見学していた女子たちに囲まれ少女は照れ笑いした。

（さすが雫、女子の間でも人気者だな）

見入っていた衛も思わず笑みをこぼしていた。

その少女の名は子蔵雫。こちらも衛の妹で、真奈の双子の妹でもある。

真奈もそうだが、雫もまた自慢の妹だった。女子バスケ部に籍を置く彼女は見てのとおりのエースプレイヤーで、その美しさと活躍ぶりから男女共に人気があった。

もちろん人気は外見だけではなく、明るく気さくな性格にもよる。今も友人たちに囲まれて爽やかな笑顔を振り撒いていた。

「入部二年目でレギュラー確定とかもーエース街道まっしぐら！ 来年は部長決定だね」

「アタシそんなの狙ってないってば。楽しく試合して勝てればいいの」

「あと男ができればね。ほれほれ、立派なお胸が寂しがってるぞー」

「ちよ、こらっ、だめだっつばもーっ」

胸を揉まれて困っている姿は、まるでみんなのマスコットだ。当人も本気で怒ったりはせず楽しそうにじゃれあっていた。

と、雫の視線が二階の兄を捉えて止まる。

「あ……アニキっ、なに見てるの！」

「あ、うん、今日の夕飯だけど、僕が作ることにになったからリクエストあればって思って」
「……うそ！ どうせいやらしい目で見ってたんでしょ」

雫は急に不機嫌な顔になり、豊満な胸を隠すように腕を組む。

「ち、違うって。真奈が帰り遅くなるから」

「ふん、どうだか。じっと見てたの気づいてるんだから」

そう言っつて唇を尖らせる雫は、つい口籠もる兄を目にして疑惑の表情を崩さなかった。

「……アニキ、鼻の下伸びてる」

「えっ？ うそ」

「ほら、そこ触ってる時点で黒確定じゃない。スケベっ、ノゾキっ」

マヌケは見つかつたとしても言いそうな妹に、衛は情けない顔してうろたえただけだ。

「パスタくらいしか上手くできないクセに。あと、アタシも帰り遅くなるから」

そう言うとききは、スタスタと練習に戻っていった。

「いやー、年頃の妹って当たりキツイよなー。美人なだけに余計こたえるかも」

隣の学友がまたしても肩を叩いてくる。

「分かるぞ兄弟、オレんちも似たようなもんだ」

「はは、似たような、ね」

何とも言えず衛は語尾を濁すばかりだった。

そんな一日が早くも終わり、一人帰宅した衛は夕飯作りにかかっていた。

「やっぱりパスタかな。唯一の得意料理だしね」

大したスキルなど持っていないがこれだけは概ね好評だった。

大鍋で湯を沸かし、塩を振ってパスタを入れて茹で上げる。ここで麺同士がくつつかないようにしっかり混ぜておく必要がある。

あとは茹で上がるまでの間にお手製ミートソースを作れば完成だ。

ちなみにこの家に母はいない。子供の頃に死別したのだ。父はすぐそこの神社の宮司で今は奉仕活動に忙しく、家事の大半は兄妹がこなしている。

と、玄関の戸が開く音がして、誰かが小走りに駆けてきた。

「ただいま！ あ、お兄ちゃん、待たせちゃってごめんなさい、すぐにわたしも手伝うね」
華のような笑顔を浮かべてセーラー服にエプロンをつけるのは、サイドポニーが特徴的な美少女、真奈だった。

「いいよ、すぐできるから着替えてきたら？」

「そんなのダメ。女のわたしがなにもしないなんて妹として失格なもの」
さっと隣に來ると、ミートソースの味見をする真奈。

「うん、美味しい！ お兄ちゃんのパスタはやっぱり最高」

「おいおい、つまみ食いみたいだぞ」

「うふふ、ごめんなさい。ちょっとわくわくしちゃって」

彼女はそう言っただけで屈託のない笑みを向けてくる。朝に見せた他人行儀とは打って変わった人懐っこさだ。

「あの……ごめんねお兄ちゃん。朝、冷たくしちゃって」

本人も気にしているらしく、上目遣いで少し気まぎれに指を組む。

「いいんだって。やっぱり照れ臭いだろうし面子つてもあるだろうから」

衛が笑うと、真奈はちょっとシュンとした。

「うん。でもほんとは学校でもお兄ちゃんと仲良くしたいの。うふ、こんな風に」
「こ、こら、くつつくなって」

真横からピタツと肩をくつつけられると、腕にむにゅつとした柔らかい感触を覚える。

(うう、ほんとに真奈のおっぱいって大きい。ちよつとしたことですぐ当たるっ)

学園一とも噂される超豊富な真奈のバストは、横へのサイズも半端ではなく肩を並べるだけで触れてしまう。その圧倒的な存在感は、兄の目から見ても色気の塊でしかない。

そんなものを押し当てられては反応しそうで怖くなり、ついそっぽを向いてしまう。

「ほら、もう茹で上がるぞ。お皿出して」

「まだ大丈夫みたいよ。それよりお兄ちゃん、顔が赤い。どうしたの？」

「な、なんでもない、なんでもないから……ううっ」

真奈が隣から覗き込むと、触れたままの豊富なバストがますます腕に押しつけられた。

ちゃんとブラをしてるんだろうか——疑問に思うほど柔らかな感触が、肘の辺りでむにゅむにゅと動く。

真奈の方は意識してないのかつぶらな瞳を瞬きさせている。無垢な表情にまたクルものがある、衛がゴクリと唾を飲みこんだところで、

「——ただいまー」

「っ！ お、お帰り雫！」

再び玄関が開く音がして足音が近づいてくる。何となくほつとして衛は大声で返事した。

「……もう、お兄ちゃんつれないんだから……」

真奈が言うものの聞こえない振りをして帰宅した妹を笑顔で迎える。

「ただいまー。むっ？ アニキ、なに真奈ねえとイチャついでるの！」

すぐさま怒声を浴びせてきたのは、活発そうなツインテールの美少女、雫である。その末妹は、くつついたままの兄と姉を見て尻尻を尖らせてズカズカと近寄り、

「ほらほら離れる！ まったく、油断するといつもこうなんだから」

二人を左右に引き離して、間に入り込み兄を睨む。

「放課後だってほかの女の子眺めて。見ててムカ——恥ずかしいっいたらないんだから！」
頬を膨らませる仕草は、怒っているというよりは拗ねているような雰囲気だった。

「別にそういうわけじゃ……あはは」

「鼻の下だつて伸びてたでしょ。アニキのことならみーんなお見通しなんだから」

「よく言うよ、僕が見てたのはしず——ゲフンゲフン」

「なによ、お目当ての子がいたつていうの!!」

慌てて咳でごまかしたが雫はますます不機嫌になる。

「ふん、だ。罰として妹を労^{いたわ}ること。そしたら許す」

兄の背に寄りかかり、雫はイジワルっぽく笑う。まるでじゃれつくネコのようなのだ。

「じゃあ、マッサージ。マッサージで手を打つてあげる。でないと口きいてあげないから」

「お前な……分かったよ。でも食べてからだぞ」

「ふふ、交渉成立！ じゃ、しつかりお願いね？ アニキっ」

兄が折れると雫は子供のような笑顔になった。

けれど今度は真奈の機嫌が少し悪くなる。

「お兄ちゃん、ほかの女の子を見てたの？ そんなの……だめ！ NG！ 副会長として
嚴重注意します！」

「真奈までちよつと……おいおい」

外の顔とはまるで違う妹たちに振り回される。

同情されたとき、学友の前で言いよんだ理由がこれだった。実は二人は、人前では距離を置くものの、それ以外ではいつも兄に構ってもらいたがるのだ。

『だって恥ずかしいんだもの』『ブラコンとか言われるのいやだし』

二人はそう言うし理解もできるのであえて何も言わないのだが、家での二人の態度を見るに、正直ブラコンすぎる気がしなくもない。

もつとも、この状況を悪く思わない自分にも問題がある気がする衛ではあった。

——深夜。自室のベッドに寝そべる雫は、そつと腕を撫でていた。

（アニキの手、あつたかかった。優しかったな）

駄々を捏ねてやらせたマッサージは、想像したよりも心地よいものだった。

二の腕を、肩を揉む掌。肩甲骨を、腰骨を押す親指。そして、そつとくびれを伝い、若い太腿を這っていく指先……

（アニキ、ちよつと緊張してた。アタシが……感じちゃってたこと、バレちゃったのかな）

おまけに、モゾモゾと動く雫のヒップが、股間部分にびたつと密着してしまい——

「っ!? あ、アニキ……やだ、そんな……」

「ごっ、ごめん、つい……」

「っ……なにがつい、よ。こんな硬く——んあつ、大きくしといて」

お尻に触れるテントの感触に雫は小さく身震いしたが、なぜか離れようとはしなかった。むしろ腰を微調整し、テントにお尻の割れ目を添えてくる。

「もう……スケベなんだから。妹に欲情するなんて」

「いや、そういうんじゃない……」

雫が反射的に弁解すると、雫はなぜかムツとした。

「なによ、実の妹なんかに欲情しないって？」

ヒップが上下に小さく動いてテントがスリスリと刺激される。挑発するような微細な官能が裏筋をジンと甘く疼かせる。

「雫、あなたお兄ちゃんになにを……?」

「この状況で、あ、アタシの身体に興味ないとか……そんなのプライド傷つくじゃない」
真奈が驚くその隣で、雫はなおもヒップを揺すった。

彼女もまた着痩せするのだろうか。伝わってくるヒップの感触は見た目以上に肉感的で、柔らかなボールが弾むように肉棒を挟んでぷりんぷりん揺れる。

(すごい……雫のお尻、おちんちんこすって……気持ちいいっ)

離れなければと思うのだが甘い疼きがそれを許さない。逆にもっと味わいたくて自然と腰が前に出る。

すると雫は、きゃん、と小さく声を漏らし、

「はう……か、硬いの、押しつけて……あつ、スケベなんだからあ……！」

腰をぶるるっ、と一つ震わせて白いおとがいを軽く反らした。

「はあ……やつぱり、欲情してるじゃない。い、入れようとすする、なんて……」

「ち、違う、そこまでは……う、ごめん……」

衛が観念して謝ると、雫は小さく笑って振り向いた。

次いで目の前で膝をつくど、兄の袴の帯を解き始める。

「やつと認めた。素直に言えばアタシが……し、してあげたのに」

「えっ、えっ？ 雫、ま、まさか……」

「こんなまま外歩いちやアタシたちまで恥ずかしいじゃない。だから……ぬっ、又いてあげるって言うてるのっ」

——シユルルッ、スルッ……びびんっつ！

袴とパンツが地面に落ちて、屹立した肉棒があらわになった。

「や……お、大きい。これがアニキの……！」

「すごい……お兄ちゃん、こんなに立派だったなんて……！」

雫は無論のこと、真奈も目を丸くした。

むき出しになった少年のペニスは、日本人の平均サイズをかなり上回るものだった。特
にカりはしつかりとむけきり、立派な傘が雄々しく開いていた。

「だ、だめだ、二人とも見ちゃだめだつて……!!」

「っ……ほら、やっぱり、妹に欲情してるじゃない。エッチなアニキなんだから」

ゴクツと喉を鳴らしはしたものの、雫はイタズラっぽく笑った。恥じらう兄の姿が多少
なりとも緊張を緩和させたようだ。

そして——隠そうとする兄の手を退けると、躊躇いがちに唇を寄せて。

「し、して、あげるからっ。アタシの口で……んっ、ちゅ……」

「ああっ! そんな、しっ、雫う……!!」

しつとりと濡れた柔らかな感触に雫は思わず肩を縮めた。何と彼女は、兄の勃起ペニス
にそっと口づけしてみせたのだ。

「やだ、びくんって跳ねてっ……じ、じっとしてよ」

反応に驚き雫はさっと顔を引いた。表情にはかすかな怯えの色があった。

それでも彼女は再び唇を寄せ、小さく伸ばした舌をカリの表面に這わせていく。

「んっ、ちゅるる……はぁ、へんな味。ちよっぴり、苦い……」

「ああ、バカなことやめろつて、雫がこんなことしなくても……!!」

「けどヌかないと収まらないじゃない。だから、し、仕方ないじゃないっ」

軽く睨みはしたものの、雫はどこか嬉しそうだつた。優しさゆえの言葉であることをちゃんと分かつているのだろう。

だからこそチロチロとカ리를舐めながら、今度は思い切つて口を開き、

「任せてよ。ちゃんとアニキの、ぬ、又いてあげるから……あむつ、じゆる……」

「うあつ!? あああそんなあ……!」

何とカ리를ぱつくりと啜え、エラまで頬張つてみせていた。

「じゆる、くちゅつ……だめ、大声出しちゃ。あの人たちにバレちゃうじゃない」

「それはそう、だけど……ああつ!」

——くちゅ、くちゅ、じゆる、ちゆる……

必死に我慢しようとしたが、すぐに喘ぎ声が漏れそうになった。彼女の頭がゆつくりとスライドし、ただただしくも唇でしごき始めてくれたのだ。

(こんな、妹の口で……ああでも、すごく、いい……!)

いけないとは思いつつも気持ちよくてうっとりしてしまふ。カりで感じる濡れた唇はびつくりするほど柔らかくつて、吸引されながらしごかれると快感で鳥肌が立つてくる。

(気持ちいい、堪らないつ。でも雫は妹なんだ、こんなことしちゃいけないんだ……)

義妹らのときもそうだったが、実妹からの唇淫戯はより強い背徳感が湧き上がる。

意識すべきでない相手。恋愛が許されない異性。その思いとは裏腹に、高まつていく快楽によって理性が翻弄される。

「雫、こんな……だめよ、わたしたちはお兄ちゃんの……っ」

隣で立っている真奈も、妹の大胆さに圧倒されていた。

彼女は首を振って兄妹であることを訴える。真面目さゆえに困惑しているようだった。だがその瞳は、熱心に肉棒をしゃぶる雫と快感で震える兄の姿を食い入るように見つめている。眉をハの字にした切なげな表情には、隠し切れない羨望の色があった。

「お兄ちゃん……気持ち、いいの？ 妹にされても悦んでくれる、の？」

おずおずと訊かれても雫には言葉がない。素直に言うのはやっぱりはばかられたためだ。けれど真奈は兄の目を見て、心を読んだように頷いた。

「……そうよね。わたしたちでも鎮めてあげられるのね。これもお兄ちゃんのためなもの」
真面目で純情な彼女らしくすでに耳まで真っ赤だった。それでも意を決したようにしやがむと、妹の右隣にきて右手をそつとサオに伸ばした。

「お兄ちゃん、わたしもお口でさせて。上手くできないと思うけど精一杯ご奉仕するから」
「ええっ？ そんな真奈まで——あ、ああ舌がっ」

——ちゅ……ぺろっ。

大事に支えるよう根元を持って、真奈は横合いからサオを舐めてきた。

「ぺろ、ちゅちゅ……はあ、ちよつと、しよっぱい。これが、お兄ちゃんの味……」

初めてのフェラに彼女ははつきりと戸惑った。瞳を潤ませ恥ずかしげに俯き、コクンと唾を飲んで兄の味を確かめるようにする。

その表情がまた儂げで美しく、少年が思わず見惚れてしまうと、真奈は努めて微笑みを浮かべて懸命に舌を伸ばしてくる。

「れろっ、ちゅびちゅびっ……どうお兄ちゃん？ 気持ち、いい？」

「はあ、はあ、それは、ううっ……！」

少し不安げな彼女の問いに、衛は上手く答えられなかった。

何というか、堪らなかつた。明らかに不慣れな舌の動きは、けれど丁寧でとても優しく、快感と同時に強い愛情が伝わってきた。

「ちゅびっ、れろれろくちゅ……はあお兄ちゃん、血管びくびくって……任せて、ここもちゃんとご奉仕するから」

覗き込むようにして熱心に下からも舐める姿は、献身的な真奈の心が現れているかのようですらある。躊躇いを残しつつ一生懸命に舌を押しつけられていると、心も肉棒も愉悅で満たされ拒絶などできなくなる。

「はあ……真奈ねえまで、アニキのをそんなに……」

隣の姉を、雫はトロンとした目で見る。

「アタシだつて、い、一生懸命なんだから。アニキのコレ、絶対イカせてやるんだから」
対抗意識に火がついたのか、雫は大きく口を開いて肉棒を目一杯頬張ってみせた。

そして大きく頭を前後しカリとエラを唇でしごく。

「んっんっじゅぶじゅぶっ！ んあアニキ、早く、イっちゃってよお……！」

「ああ雫つ、そんな、は、激しくうっ！」

「お兄ちゃん、わたしも……もつとがんばりますっ！ はむっ、くちゆくちゆるっ……！」

「おあつ真奈あ、お前まで激しくっ、ああすごいっ……！」

真奈も負けじと横から啜えてサオを熱烈にしゃぶり始めた。さらにその手は睾丸に伸び、やわやわと優しく揉み解していく。

「はあ、はあ、だ、だめだ二人ともっ、このままじゃ、僕……！」

高まる射精衝動にわななき衛は声を我慢するのもやっとなだつた。

今や二人は躊躇いも忘れ夢中でフェラチオしてくれていた。その姿はまるで肉棒に群がり、アイスキャンディーでも取り合うようにしゃぶりついている。跪いてご奉仕してくる二人の様子を見ているだけで、牡としての優越感まで満たされていくのが分かった。

「くちゆくちゆるるっ、はあはあ、んふう、お兄ちゃん……！」

「ぐぶっじゆる……んああ、アニキい、ぬるぬるの汁、溢れてるう……！」

その上二人も興奮の色を隠さない。悩ましげに寄る眉根、真つ赤になった汗の浮く頬、唾液をこぼす唇にトロンとした濡れた瞳、それら官能の面持ちが色香をより際立たせる。

（ああ、僕、真奈と雫を女の子として見てるっ！）

認めるのは怖い、それが真実だった。

その証拠に、肉棒はこのまま精を放とうと脈動しながら鈴口を開く。

「んあつ、アニキびくびくつてえ……いいよ、このまま、このままあ……！」

恍惚の表情で唇を離すと、雫は口を開け鈴口をチロチロと舌先で舐めた。

「はあ、わたしにもっ、わたしにも出して、お兄ちゃん、お兄ちゃん……！」

真奈も亀頭に顔を寄せて、エラを舌先でくすぐってくる。

並んで待つ実妹たちのエッチな顔を見て、衛は我慢の糸がプツンと切れる音を聞いた。

「ふ、二人とも、もう——出るっ！」

——びゅびゅううっ！ びゅっびゅっびゅっびゅっ！

衛は腰を震わせながら、実妹たちに思い切り顔射してしまった。

「きゃんっ！ はああん、あはあ……！」

悩ましい声をあげる彼女らに白い粘液がびちゃびちゃと降り注ぐ。溜まっていたのか予想以上に量が多く、粘度があつて色が濃かった。

「はあ、はあ、やだ、こないっぱい……アニキの、白いの……」

口を開いて待っていた二人は、顔中に粘液を浴びせかけられたちまちま白く汚れていく。

「あんっ、あはあ、お兄ちゃんの、熱いの、いっばいいっ」

「はあはあ、ごめ、ごめん真奈、雫、顔にこんなっ！」

「はあ、ああ……ん、大丈夫。お兄ちゃんが満足してくれたなら」

真奈は柔らかに微笑むと、汚れを気にもせず何と——口に溜まった精液を味わいコクン、と飲み込んでみせた。

「美味しい……お兄ちゃんの味。お兄ちゃんの赤ちゃんの素……」

「真奈、そんな……僕の精液、飲んじゃうなんてっ——！」

小さく震え目を閉じる彼女の、そのウツトリとした表情ときたら——もう、このまま押し倒してしまいたいくらい艶めかしいものだった。

（だめだ、これ以上女の子として見ちゃいけないっ。でも、でもっ！）

この唇を思うまま奪い巫女服を一気に脱がせられたなら、どれほど興奮するだろうか。そんな妄想が脳の奥に沸々と湧き上がってくる。

「はあ……いっぱい出たねアニキ。けど、まだ硬い……」

ひとしきり射精が終わったところで雫が肉棒を撫でてくる。

「アタシたちのフェラ、気持ちよかった？ そうだよね、自慢の妹だもん」

果ててもらえて嬉しかったのか、声は少しだけ弾んでいた。

兄が思わず赤面すると、雫はクスツと笑い、再びカりに唇を当てる。

「仕方ないなあ。もうちょっとだけしてあげる。あとお掃除もね」

「うふふ、わたしもお掃除するから。じつとしてて、お兄ちゃん」

真奈ももう一度舌を伸ばして精液の残りを舐め取っていく。その眼差しにも、すでに緊張より悦びの色が表れていた。

「だ、だめだほんとに、これ以上はもう——あうっ」

今度は真奈がカ리를頬張り、ちゅうっ、と残滓を吸い出してくれる。

結局そのまま流されてしまい、二度も果てる羽目になる衛。



「お兄様、皐月の処女ももらってあげてください。きつともうびしょびしょですから」
 美月も開脚を手伝い、さあ、と促してくる。

「まもニィ……見て。皐月のココ、もうおツユでいっぱいなの。まもニィのおちんちん、ちやんとオクまで届くようになって……」

小さく舌を出しはにかみながら、皐月は自らショーツをずらした。

「つっくまったく、エッチな子になっちゃったな皐月までっ」

そうは言うものの新たな興奮に内心沸き立っていた。

あらわになつた皐月の秘所は、姉以上に初々しいものだった。あまりにも薄い桃色の溝は、まだ幼さを残すようで本当に入ると怪しいほどだ。

けれど奥からは、大量の蜜がとるとと溢れ出していた。どうやら見ていただけで、すっかり準備ができてしまったようだった。

（見た目は一番子供っぽいのに。きつと濡れやすいんだな）

何だか異様にエロく思えて肉棒はさらなる熱を帯びる。

彼女の言うように、どの道美月とはしてしまつたのだ。皐月だけ拒むのはあんまりな気がする。それにここまでできてやめたら、相手にひどく恥をかかせると思った。

「……分かった。じゃあ、い、入れるよ？ いいんだね？」

「うん。お願い、まもニィ」

彼女がコクンと頷くのを見て、衛は割れ目に亀頭を添えると、少しずつ中へ押し進める。

「んあつ、あ、あ……！」

「くっ、すぐくキツイ……平気か皐月、痛くないか？」

「へ、ヘーキ、皐月ヘーキだよ……っ」

見た目どおり中は狭く兄の巨根はこたえるようだが、皐月は目尻に涙を浮かべながらも健気に微笑を浮かべてくれた。

「まもニイ、大好きっ。大好きだから、バージン、もらってええ……っ」

その微笑には確かな恋慕、そして何より、二度と離れたくないという強い願いがあった。こんなに一途で寂しがりやなのだ、自分が愛してあげなければきつとだめになってしまふ。衛はそう確信し、改めて胸を熱くした。

「皐月……大好きだよっ！」

「んっ!? んんっ、まもにい——んっんんんっ！」

——ぶっつ、ずぶぶっ！

衛は思わず唇を奪いつつ肉棒を奥まで押し込んでいた。

（くうっ、すごい窮屈っ！ でも——気持ちいいっ！）

小柄な彼女らしい狭い膣内は、物凄い圧迫感があった。筒状粘膜がぐいぐい締めつけてまるで押し返そうとするかのようだ。

同時に擦れる感触も半端ではない。ツブツブいっぱいの肉ヒダの感触は姉以上に刺激的で、二度果てた直後だというのにたちまち射精感がやってくる。

「はあ……はあ……まも、ニイ、やったよ、皐月がんばったよ」

キスをやめて顔を離すと、肩で息をする義妹と目が合う。

「ああ。えらいぞ、さすがお兄ちゃんの妹だ」

「えへ……ありがと、まもニイっ」

潤んだ瞳をニコッとさせて皐月は結合を喜んでくれる。天使のような無垢な笑顔には、深い満足感とたくさんの愛情が籠もっていた。

（痛くても我慢できるようになったんだ。皐月、ちゃんと成長したんだな）

兄として何となく感慨深くなる。幼い言動が目立つ妹だが決して子供ではないのだと。

改めてレディだと認めた衛は、彼女の魅力に惹かれる心地で再び唇を奪っていた。

「んう——くちゅっ。はあ、まもニイ、またちゅー……嬉しいよお」

ちよつとディープに吸ってみると、皐月の身体の緊張が和らぎ瞳がトロンとなってくる。

「そっか。皐月はちゅー好きか」

「うん、大好き。恋人って感じするし、胸がキュンってするから」

その表情は本当に幸せそうだった。心なしか唇を突き出しキスを求めているようでもある。思えば初めてのキスのときも皐月はとても喜んでいて。キスが本当に好きなのだろう。

「そっか。じゃあ、がんばったご褒美あげないとな。ちゅっ、くちゅる……」

「んふう……あふ、まもに……んんっ」

想いを込めたディープキスに、皐月はすぐさま反応し始めた。

「ちゆる、くちゅっ……はあまもニイ、ちゅー、キモチいいよ。胸キュンキュンしてもっと、したくなるう」

瞳をますますトロンとさせて舌を積極的に絡めてくる。唇そのものが性感帯なのか、舌先でチロチロと舐めてやるだけで、あんっ……と可愛らしい鼻声を漏らす。

そんな様子がまた魅力的でついつい夢中でキスしていると、次第に皐月はくびれまでもじっ、と動かし始めた。

「んちゅ、くふうん……はあまもニイ、ご褒美よすぎて、頭ぼーつとなっちゃうよお」

「くす、皐月はキスが大好きなのね。お兄様、そろそろ続きを」

「分かった。じゃあ皐月、動くからね？」

美月に見守られながら、二人はゆつくりと腰を擦り合わせ始めた。

「あつ、あうつ、まもニイ、ホント、おつきい……皐月のオク、こっんこっんってえ……！」

「分かるよ、ああ、皐月の子宮口に届いてるんだな」

小柄なだけに膣洞も小さいのか、八割ほど入ったくらいでカリが奥に突き当たる。

その少し硬めでこりこりとした弾力感が、敏感なカリには堪らなく気持ちいい。

「んあつ、はふう……お腹、ずんずんきてるう。おつきくて、ぐいぐいきて、皐月、皐月なんだか……」

しかもそこは皐月にとっても感じやすいポイントらしい。意識して軽く押していると、吐息がどんどん湿り気を帯びて眉根が悩ましげに寄り始める。

「皐月、感じてるんだね？ どんどんエッチな顔になってくるよ」

嬉しくなって覗き込むと、皐月は腰をくねらせながら拗ねたように唇を尖らせる。

「うう……まもニイのイジワル。まもニイだつてえっちな顔してるもん」

どうやらちよつと恥ずかしかつたようで、眼差しは若干恨めしげだ。

けれど嬉しくもあつたのか、ぼつと頬を染め直し、指を啜えてイタズラっぽく笑う。

「はあ、はあ……んふ。きつとまもニイのせいだね。皐月のおま○こ、どんどんまもニイ専用に使われて……いっぱい赤ちゃん産むえっちな子宮にされちゃうんだ？」

（っ!? か、可愛いつ！ いや色っぽい！）

流し目を作る誘惑の表情は、いまだかつて見たことがないほど妖艶で大人びて見えた。

まるで未熟な小悪魔が男の味を知ってきたような。みるみるうちに大人の女へと昇華しているような。何とも不思議な甘い色香が感じられる。

それを見て衛は火がついてしまい、思わず腰を大きくスイングさせていた。

「あふうん!? ま、まもニイ、すごいオクう!？」

「ごめん、お兄ちゃんもう、我慢できないっ！」

「んあつあふううううんっ！」

——ずんずんぐちゅぐちゅぐちゅっ！

強い興奮に後押しされて衛は一気に抽送を開始した。狙いは彼女の感じやすい子宮口。そこを熱烈にプッシュすることでエッチな表情をもつと見たかった。

そしてその効果は観面てきめんだった。急所を小刻みに責められた皐月はびくんびくんと激しく悶え、表情を急速に蕩けさせ始めたのだ。

「あふうだめえ、ああだめだよまもニイいつ！ オクばつかだめえ、子宮跳ねちゃうつ、皐月とぶう、皐月とんじやうよおお！」

そこが相当に敏感らしく、コツコツとノックを繰り返すたびに可愛いヒップが何度も跳ねる。全身がみるみる桃色に染まり汗珠が小さく散り始める。

しかも丸い子宮口が、まるで口づけをするかのようにカリにぷちゆりと吸いついてくる。「ああすごい、奥までキスが好きだなんて、なんて可愛くてエッチなんだっ！」

狭い腔洞を擦過するだけでも強い甘痺れが肉棒を駆け巡るのだ。この上カリをちゆうちゆう吸われては堪らない。あつという間に尿道が緩んで精液がぐんぐん駆け上がってくる。

「はあつはあつ、あうんまもニイのおちんちん、オクでいっぱいちゆうしてるう！ 子宮にちゆう、キモチいいつ、ホントとんじやうよおおっ！」

「いいよ皐月、すごいエッチな顔っ！ 僕ももうイクっ！ 可愛い皐月と一緒にっ！」
「んああ嬉しいよお！ まもニイ、あふうまもニイいつ！」

真っ赤になって喘ぐ顔にはもはや幼さなど感じられない。若い乙女の乱れた官能の表情だ。何とも艶めかしいその姿を見て兄の興奮もますます高まる。

「くう、もう出るっ！ 今度こそ外にい——！」

「だめえだめだよまもニイ！ ナカにちよおだいつ、セーエキつ、赤ちゃんんっ！」

今度も抜こうとしたところで腰に両足を絡められる。焦る衛はそれでも避妊を試みる。が、背後から美月が背を押してきて、それはあえなく遮られる。

「いけませんお兄様、臍月にもたくさんお子種を注いでください」

「欲しいよ、欲しいよまもニイ！ ナカにどくどくう、子宮にたっぷりいっ！」

「そんな、あ、ああっくくあだめだあっ！」

——っどくん！ どくっどくっどくっどくっどくっ！

二人にがっちりホールドされて、衛は大量の精液を妹の膣奥に注ぎ込んでしまっていた。(ああそんな、臍月にまで中出しをつ！ 大好きだけど、でもいきなり子供なんてっ！)

正直いって、もう単なる妹だとは思えない。愛おしい。女性として見たい。お付き合いたいとも思う。だが恋愛期間をすっ飛ばして子作りというのはやはり抵抗があった。

そんな内心の葛藤とは裏腹に、ペニス心地よく子種を撒き散らしていく。生殖本能に流されるまま、子宮口に鈴口を押しつけ直接注ぎ込んでいく。

「はあああ、すごいまもニイのセーキィ——お腹んナカでびしゃびしゃってえ……！」

粘液が当たる刺激ですら敏感な奥で感じるらしく、臍月は表情をトロトロにしてウツリと腰を回してみせる。

「分かるよ、おちんちんオクでいっばい出してる。ニンシン……させたがってる……」

「い、いや、そんなことはっ。だからいきなり子供なんて」

「いいえ、愛し合う男女に子供は不可欠。兄妹であつてもそれは同じです」



「なっ？ 失礼ですわね、ちゃんとわたくしが愛情こめて作ったものです」

思い返している間にも、二人の舌戦はすでに始まっていた。

「うそよ。お米の炊き方だって知らなかったくせに」

「う、前は家政婦さんが……けれど勉強しましたわ、レシピも完璧なはず！」

「一夜漬けの手料理なんてお兄ちゃんに食べさせないで。お兄ちゃんの、ううん、旦那さまの健康管理は妻であるわたしの責任だもの」

「真奈さんこそ味つけの濃そうなものは控えてください。お兄様のお身体に毒です」
次第にエキサイトしてくるのを見て、衛は、はあ、とため息をつく。

「まあまあ二人とも。どれどれ……うん、どっちも美味しい、ほっぺが落ちそう！」
本当は味どころではなかったが、両方頬張って大げさに笑う。

が——一拍置いて急に鼻がツーンとなった。

「うおっ！ これ、すごいカラシきいてる——！！」

「えっ？ そ、そんな、まさかカラシ入りのマヨネーズを？」

「ちよつと、ポテサラにそんなの使わないで！」

原因は美月の手料理らしい。お嬢様育ちなだけに家事は不得手なことを失念していた。

「もう、やっぱりお兄ちゃんの食事はわたしが作ってあげないとね。はい、今度はダシ巻き卵ね。いっぱいあるから遠慮しないでどうぞ」

料理では真奈に分があった。実母を亡くして長いため家事経験は美月の比ではないのだ。

これまで後手に回ってきた分を取り返すように真奈は元気になる。

「はいどうぞ。うふふ、お兄ちゃんっていっぱい食べてくれるから……大好き」

ライバルの笑顔を見て、美月はむむう、と悔しげに唸る。

「っ……でしたらお兄様、こういうのはいかがですか？」

何か策を思いついたのか、美月は背を向けてごそごそしだした。

ややあつて振り向いたその姿は——何とおっぱいが丸出しとなり谷間にはサニーレタスが挟まれていた。

「み、美月さんっ、む、胸で、なにをっ？」

「くす、ささやかながらの味つけですわ。さあお兄様、召し上がって」

美月は妖艶な雰囲気で言い、ペンチで膝立ちになつて胸を目の前に持つてくる。

「美月、ああこんな……綺麗なおっぱいで、食べ物……」

「どうぞお兄様。お望みならわたくしの胸——おっぱいも一緒に食べてくださっても……」
大胆に迫つたが本音は恥ずかしいに違いない。白い頬は赤く染まり、吐息が少し熱っぽかった。それでも負けていられないと、Eカップほどの形よい美乳を口元に運んでくれる。その美しい膨らみに挟まれたレタスを、少年は躊躇いながら口に啜えた。

「はあっ……いい、いかがですか、お味は」

「むぐ……美味しい。温かくて、なんだか美月の味な気がする……」

ほんのりとした甘い芳香はきつと汗の香りだろう。さっぱりとしたほのかな甘みがレタ

スを絶品に変えているような気がした。

「くす、嬉しいです。では、次はこちらをどうぞ」
続いて美月はスクランブルエッグを乗せてくる。

（ううっ、いやらしい。胸に卵が広がってる）

半熟状の卵は谷間で挟むことはできず、寄せて上げられた胸の間に液体のように乗っている。それがトロリと滴っていき、谷間周りを黄色くデコレーションしていた。

何とも艶めかしい姿に見惚れつつ少年が卵を軽くつえばむと、美月はそのまま脇を締め、乳房をむにゅつと押しつけてくる。

「はああ……んっ、お兄様、もっど……召し上がって」

「美月……あむっ、ちゆるるっ、はむっ……」

「はああっ、ああ、お兄様あ……!!」

吸るように卵を食べると自然と唇は乳房に触れた。深い谷間はほかほかと温かく、唇に触れる美肌の感触は絹のようになめらかで快い。口に広がる卵の甘さは、まるで彼女の巨乳の旨みそのもののように思えた。

（美味しい。卵の味、美月のおっぱいと汗の味、堪えない……）

衛はすぐにも恍惚を覚え、ゆったりと谷間を吸り始める。卵風味の美味な丸みをこのまま食べてしまいたい気分だった。

「あはあ……お、お兄様、そんなに急がなくても、まだたくさんありますから……」

さらに卵を谷間に垂らして美月は甘い吐息を漏らす。クールな顔立ちは、すでに胸の官能で火照り、うっすらと汗ばみ始めていた。

「わ、わたしだつてそのくらい……お兄ちゃん見て。わたしの……た、食べて欲しいの」二人を見て歯噛みする真奈は、意を決したように自分も制服の裾を上げた。

一気にブラも上にずらして超特大のバストを出すと、その先端の小さな突起に、何とチエリーを指で一つずつ添えてみせた。

「お兄ちゃん、これも食べて……わ、わたしの、サ克蘭ボ……」

それを見た衛は思わず生唾を飲む。薄桜色の彼女の突起はすでに軽くしこつており、まるでチエリーに隠れるようにしてぶつくりと膨らんでいた。

こんな可愛くてエッチな果実を食べてしまうなんてもつたいたない。少年は興奮を抑えられず、合計四つのサ克蘭ボたちを舌でレロレロと転がしていた。

「ああんだめえっ！ お兄ちゃんそんな、たつ、食べて欲しいのに、舌でいっぱい……！」
「れるれるっ……ごめん、でも食べたくない。可愛いサ克蘭ボもつと舐めてたいんだ」

「そんなあ、ああん、わたし乳首弱いのに……！」

それを分かつて差し出したのはきつと焦っていたからだろう。ちよつぴりドジで敏感な彼女が一層可愛く思えてしまい、衛は腰に手をやって抱き寄せなおも唇で吸いついていた。

「あつだめお兄ちゃん、いっぱい舐めちゃ……あつああん囁んじやだめえっ！」

チエリーの代わりに桃色ニプルが甘噛みされると、真奈はくびれを強く振って爆乳をぶ

るるんっ！ と大きく揺らす。

「もうっ、お兄様、わたくしのチェリーも召し上がって！」

無論美月も黙ってはいない。真奈の弁当箱に手を伸ばすと、彼女もまたチェリーを突起に添えて寄せてくる。

「ああ美月まで——分かったよ、さあもつと寄せて、いっぱい味わっちゃやうからねっ！」
左右から美乳と爆乳を寄せられ、衛は一気に燃え上がってしまった。

美月のくびれを強く抱くとその美乳にも口づけをし、まずは垂れた卵の残りを思いつきり舐め取る。それだけで彼女は、はあっ！ と鳴いたが少年はまだまだ許してあげず、お望みどおり四つのチェリーを左右交互に舐めしゃぶった。

「あっあはあああっ！ こんな、ああ乳首ぴりぴりしてしまつてえ……あっいやあ、転がすのダメです、感じてしまいますうっ！」

こちらも感度は十分なようで、みるみる表情が蕩けていく。自前のチェリーも硬くしこつて官能をあらわにしていた。

「はあはあ、だめお兄ちゃん、わたしのお、こつちを食べてえ……！」

真奈も爆乳をもつと寄せてきて競うようにおねだりしてくる。その唾液と汗で濡れた突起を少年は再び口を含む。

「真奈、すぐくびんびんに……ちゅっ、ちゅううううっ！」

「あっあああはあああんっ！ お兄ちゃんもうっ、乳首が、乳首イっちゃうう！」



「はあはあ、お兄様わたくしも、お願いですもつとお——あつああいいですううっ！」

——ちゅぷちゅぷれろれろくちゆるっ！

衛はすつかり興奮しきつて夢中で二人のチェリーを味わった。

本物のチェリーを舌で躍らせ乳輪をぴちぴち叩きながら、快感に勃起した四つのニプルを交互に繰り返し強く啜る。時折乳房全体を舐めて唾液をねつとりと塗していき、陽光で光る膨らみたちを五指でむにゅむにゅと揉みしだく。

まさに乳房を味わうようなダイナミックな愛兄の淫戯に、二人の美妹は背筋を波打たせ大胆なくらいに身悶えていった。

「はあつはあつお兄様あ、うそみたい、ああわたくし胸だけで、い、イキそうにいいっ！」
「あんんつわたしもイっちゃううっ！ 舌いいのお、唇ぬるぬるして蕩けちゃううっ！」

いつしか二人は腰まで揺すって迫り来る絶頂感に震えている。白い頬には汗珠が伝い、唇は呼吸を絶え間なく漏らす。

そんな妹らをますます愛しく思いながら、少年は四つのニプルチェリーを両手で集め、同時に目いっぱい吸引した。

——ちゅううううちゆるるるるっ！

「はあああお兄様あああつ！」

「ひあつお兄ちゃんつつああああんんつ！」

——びくびくっ、がくんっ、がくんっ！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元的なヒロインは、美満の方に入ってください。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!